

日本音楽表現学会 ニューズレター第2号

J・M・E・S

2004年3月10日発行

『2004-5年度 役員選出特集』 目 次

| | |
|------------------------------------|----|
| 1. 巻頭言「音楽表現に関わる科学的体系化への道」 | 2 |
| 2. 2004-5年度役員選挙に向けて | 3 |
| 1) 選挙管理委員の任務 | 3 |
| 2) 選挙日程 | 3 |
| 3) 「推薦・立候補制に関するアンケート」結果報告 | 4 |
| 4) 会長・理事の推薦・立候補に関する手続きについて | 4 |
| ・会長・理事の推薦・立候補に関する要項 | |
| ・2004年度会長・理事選挙各種様式 | |
| 5) 選挙関係名簿 | 6 |
| ・会長・理事選挙資格者名簿（2004年3月8日現在の会員） | |
| ・会長・理事候補者者名簿 | |
| 6) 日本音楽表現学会選挙管理委員会規定（2004年度選挙用仮規定） | 7 |
| 7) [参考資料] 選挙関係会則抜粋と内規 | 8 |
| 3. 編集委員会便り | 9 |
| 4. 機関誌『音楽表現学』第2号原稿募集 | 9 |
| 5. ライラック大会の研究発表募集とご案内 | 10 |
| 6. 学会員の声 | 11 |
| 7. 新入会員名簿 | 14 |
| 8. 科学研究補助金分科細目，演奏会の後援等のお知らせ | 15 |
| 9. 「入会申込書」書式 | 16 |
| 10. 「演奏会後援願」書式 | 16 |
| 11. 役員名簿・編集後記 | 16 |

日本音楽表現学会事務局 〒700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学教育学部 奥研究室気付
Tel. & Fax. 086-251-7647 E-mail: s-oku@cc.okayama-u.ac.jp
http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/ eeakita/kitayama/OHG-index.htm

日本音楽表現学会副会長 草下 實（声楽）

音楽表現を多面的分野の研究者が結集して思考し、新たなる課題を見出し、研究し、その成果の発表や情報を交換する場としての本学会の存在は極めて意味深い。殊更、音楽専門分野、高等教育、学校教育等、社会の期待も大きいと自負するのは私だけではないでしょう。学会発足に当たっては全国から西洋音楽分野のみならず日本伝統音楽分野や言語文化研究のオーソリティーの参加によってあらゆる音楽表現に関わる研究連携が可能となったのも本学会の特性でもあります。

つまり、音楽表現に関わる科学的体系化への道が開かれ、第一歩を歩み始めたということになります。この10ヶ月の間に会員の皆さまの力強いご支援、事務局をはじめ各役員のご努力によって、記念すべき第1号学会誌を刊行し、ニューズレターは今回で2回目を発信するなど学会活動は順調に進んで参りました。しかしながら、学会といたしましてはまだ未整備なところもあり、今後の運営には会員の皆さまからのお知恵と更なるご助力をいただく必要があります。

音楽表現を学問として体系づけるためには、表現そのものを精査し、誰もが認知できる普遍の概念として方向づけ、理解することは不可欠であります。特に文学や美術分野における表現は作品という最終的段階まで個人の発想と技量によって完成されるのに対して、音楽分野の表現は特別の場合（パソコン・ミュージック、シンガー・ソングライター等）を除き、作品創作と演奏によって完結する。作品となる前段階においてはテキスト作家と作曲家の二通りの表現が介在する場合もあるし、演奏においてもその形態によっては演出家、

指揮者、伴奏や重唱といった多様な表現媒体の連携によって表現されるものも多い。このように音楽表現と言ってもその表現形態とあり方は様々です。

音楽表現活動において、卓越した作曲家による音楽作品上の表現、錬磨された演奏家の表現は曖昧な解釈や技能からは決して生まれることはありません。真の姿を見極めるため精緻な観察力、及びものの本質を見極めるための洞察力、さらにものを正しく見極めるための知力、美の本質を識別する審美眼、ものの微妙な変化や動きを感知する感覚機能、多様な美的要素を立体化あるいは統合、組織化する創造力等々、これらに関わる理論分野や他の音楽関連専門諸科学の深化した研究と連携によって音楽表現学が具体化されるように思われます。

このように述べますと重苦しく複雑怪奇な世界のように思われるかも知れません。しかしながら、世界レベルで活躍する著名な演奏家の多くは、彼らの演奏活動を通して得た音楽表現上の理論的背景に裏付けされた確かな叡知を有しており、その説得力に勝るものはない。つまり、そうした経験から培われた現場の音楽表現理論こそ音楽表現学を成立させるひとつの重要な鍵となるものと確信する次第であります。

次回の学会開催の地、北海道で“バタジャが”でもつつきながらこの話のつづきができれば最高です。会員の皆さまとお会いできるのを楽しみにしております。

V | äxw | tÄÉ | Ç [É ~ ~ t | wÉâA T ÜÜ | äxwxÜv | ? V | tÉA

昨年5月の設立大会からスタートした編集委員会は、安田香委員長を中心にして、加藤富美子、権藤敦子、土門裕之の各氏と北山の5名で活動を進めてきました。実務的には奥事務局長との連絡を密にしなが、主として電子メールで意見交換をし、2回の全体ミーティング（岐阜、静岡）、中国・関西地区在住の委員による作業ミーティング等を重ねて、昨年末、ようやく皆さまのお手もとに「音楽表現学」の創刊号をお届けすることができました。

「音楽表現学」の特徴は、ごく一般的に用いられてきた「音楽表現」という概念を学術的に表現すること（これを目的とする学会がこれまでに存在しなかったことが不思議です）と、音楽表現に関するさまざまな分野の研究者や教育者がお互いの情報を交換し共有する場（まさに「学際的」ならぬ「楽際的」な研究の場とっていいでしょう）を提供するという点ではないでしょうか。創刊号に掲載された論文4編、研究報告2編、寄書1編、そして設立大会の報告は、この特徴を冊子として具現化したものになっています。

創刊号をごらんになっての皆さまのご感想はいかがでしょう。この学会誌には、論文や研究報告を書き慣れている方はもちろん、これまでどちらかといえば演奏や作曲などの活動が主であった方々からも貴重な研究成果をお寄せいただきたいと思っています。とはいえ、音楽表現の広範囲な研究分野を網羅するにはまだ不十分な点が多いかもしれません。掲載のスタイルや投稿規定等については、今後も会員の皆さまからのご意見をうかがいながら、編集委員会で慎重な検討を重ねていく必要があるかと思えます。編集委員の一人として、この「音楽表現学」が会員一人ひとりの力によってさらに大きく発展していくことを願ってやみません。

現在、「音楽表現学」vol.2の原稿を募集しています。応募締め切りは6月30日です。投稿規定については、創刊号（vol.1）の巻末およびニューズレター第1号をごらんください。ご不明の点は事務局までお問い合わせいただければ幸いです。できるだけ多くの会員の方からの投稿をお待ちしております。（以上）

『音楽表現学』 Vol.2 原稿募集!!!

Vol.2の原稿応募締め切りは2004年6月30日です。

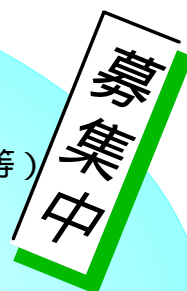
1. 図版、譜例は提出のものをそのまま拡大あるいは縮小して使います。原稿段階では些細と思われる粗雑さも、完成した論集のなかでは想像以上に目立ちます。どうか美しいものをご用意下さい。また、論集全体の体裁との関わりで、図版、譜例のレイアウトについて修正をお願いすることがあります。
2. 作品研究に関わる譜例は、論考に必要な部分を抽出して下さい。著作権等のトラブルを未然に防ぐために、全曲掲載には原則として応じられません。特に、自作品研究の場合、学会誌上の楽譜掲載が結果的に作品発表になりますと、加えて出版権の問題も発生いたします。
3. 図版、譜例を除いた部分につきましては、ハードコピーとともに是非ともメールに添付してご提出いただきたく思います。それによって、編集作業が非常に能率的に進みます。添付のソフトの種類については、事前に事務局にお問い合わせください。

日本音楽表現学会第2回全国大会

(ライラック大会)

期日：2004年6月5日(土)・6日(日)

会場：北海道教育大学札幌校(札幌市中心部よりバス, JR等)



音楽の演奏, 創作, 教育等の実践に関する学術的研究発表

音・音楽をフルに生かした,

日本音楽表現学会ならではの研究発表を携え,

札幌に集いましょう。

持ち時間：30分の発表と10分の質疑応答

応募方法：題目と要旨(1500字), 発表希望日を
ハードコピーとフロッピーまたはメールで事務局まで
〒700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学教育学部
s-oku@cc.okayama-u.ac.jp

締め切り：2004年4月30日(金)

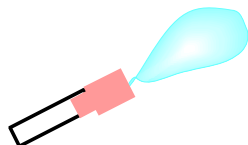
日程(仮)：2004年6月5日(土) 12:00 受付開始
13:00 開会
13:10 基調講演 *谷本一之氏(～14:00)
「異文化からみた音楽表現の広がり」
14:10 アトラクション(～14:40)「アイヌの歌と踊り」
14:40 ワークショップ(～15:10)ムックリ, 踊り
15:20 研究発表(～16:00)
16:15 総会(～17:15)
～ 移動 ～
18:00 懇親会(サッポロビール園。～20:00)

3月初旬段階の
予定です。
変更の可能性も
あります。

2004年6月6日(日) 9:00 受付開始
9:30 研究発表(～10:10)
10:15 研究発表(～10:55)
11:00 研究発表(～11:40)
11:45 研究発表(～12:15)
12:20(終了・解散)

音楽表現の
プレゼンテーションが
含まれることを予想して,
他の学会により持ち時間を
長くしています。

会費：学会員 = 4000円, 学生 = 2000円(?)



実行委員会では中村隆夫委員長, 土門裕之副委員長, 河本洋一事務局長を
中心に着々と準備を進めています。みなさまのご参加をお待ちします。



学 会 員 の 声

研究発表の日を夢見て

坂東 肇(神戸大学発達科学部音楽表現論講座)

音楽の表現創造に直接携わっている者として、日本音楽表現学会の誕生は誠に喜ばしく、大きな期待をもって、研究発表できる日を夢見ています。

私の専門分野は、ピアノの演奏研究です。演奏は、生命の響きそのものであり、人間のすべてを映し出すものです。ゆえに、演奏研究即ち人間研究そのものである、とも考えています。具体的な研究テーマは、「ピアノ演奏におけるコミュニケーション」です。

音の中に込められた想いはどこからどのように発し、どのような形をとって表現となるのか。そして、それがどのように人の心や対象となる物（楽器やホール空間）に到達して反応し、さらなる表現を呼び起こすのか。また、人間の発達や人格の発達が、音楽表現や音楽受容にどのような変化をもたらすのか。これらの疑問が研究の動機となっています。そして、自らの演奏会をフィールドワーク及び実験と位置づけ、ソロやコンチェルトのみならず、声楽や管楽器、弦楽器とのアンサンブル等の研究も行ってきました。

そのなかで、ここ6、7年、最も興味を持って取り組んでいるのは、弦楽器とのアンサンブルです。私の選んだ共演者は、世界的なカルテットであるチェコ・プラハの『シュターミッツ弦楽四重奏団』で、彼らと起居を共にしながらの演奏会は、常にその準備段階から刺激に満ちています。彼らは皆一流の演奏家であると同時に、義理人情に厚く率直素朴な好漢揃いで、私と同世代でもあり、安心して本音をぶつけあうことのできる研究仲間です。

日本人とチェコ人、しかも打弦楽器と擦弦楽器の共演ですから、そこには当然、さまざまな異文化・異分野の壁が存在します。しかし、あらゆるものを乗り越えて演奏会本番で目的を達成する醍醐味は格別で、音楽のもつ力をまざまざと感じさせられます。ここには、人類が有史以来切望する、共存共栄による理想世界実現の雛型が存在するのです。ゆえに、優れた音楽表現を目指す演奏のプロセスも、理想実現を希求するプロセスそのものと捉え、そこに内在するシステムや諸課題の探究に大きな意義を見出しています。

また、このような体験から、演奏研究に加えて独自に取り組み始めた研究もあります。それは、音楽のもつ力を、色々な角度から光を当てて科学的に解明しようという試みで、生理学、心理学、音響工学、経営学等の研究者との共同研究です。この研究も、シュターミッツ弦楽四重奏団と作り上げていく演奏のように、異分野の結集で、創造性にあふれた新しい成果を出せれば、と思っています。

日本音楽表現学会の魅力

鈴木昇畝（尺八）

音楽は当然表現するものであるにも関わらず、この学会の名称にわざわざ「表現」という語を用いたところに惹かれてしまった。「表現」とは何だろう。いい表現とはどういうことだろうか。演奏する人の心を表さねばならないだろうか。

かつてテレビでこんなことがあった。新人の流行歌手がNHK紅白で歌っているときだと思っただが、歌手は感極まって泣けてきて、声が出せなくなってしまった、うれし涙である。でも曲は悲しい内容を歌うものだった。悲しい曲がうれしい涙でまみれてしまった。気持ちは分かる。激しい生存競争に勝ち抜いてやっとのことでの紅白である。感激しないはずはない。今それを悪いと言っているわけでない。このことから音楽の演奏は演奏者の心の内をお客さんに感じてもらうことではないことがわかる。

さて別の角度から。今から20年ほど前、上野駅前的小ホールで当時小学校5年生のK君の尺八演奏を聴いたことがあった。福田蘭童作曲「月光弄笛」であった。しかも暗譜である。世の大人たちは譜面を見なければ何もできない現状だったので、大きなショックを受けながら演奏に聴き入っていた。

私は後から師匠の解説を受け、テクニックが高度でなくても演奏者その人のレベルでけっこう人は感動できるのだということがよくわかった。4,5分で終わる曲を楽譜にかじりついて吹くのでは誰も聞いてくれないのだということを肝に銘じた次第である。

次は演奏者にとってとても嫌な話、結婚披露宴や各種パーティーでの演奏である。順番が来るまで酒を飲まずに待ち、演奏が終わって席に戻るとご馳走や酒類は完全になくなり、ウナギの餌みたいなものだけが皿の上に残っているのは悲しいやら腹立たしいやらで、今もって食い物の恨みを引きずっている。我慢ならないのは、日頃奥様然とした方が演奏中にバイキングに熱中になって食い漁り、演奏に見向きもしない状態。これには悩む。主催者の設定に大問題があるとしても、いい表現をしても相手に通じないのは大変悲しい。

吹奏楽器や歌唱では「ブレス」をどこにするのが、表現上重要なことである。ピアノでもブレスが重要であるだろう。息をどこで吹い、どのように吐いていけばよいのかを研究するのが音楽表現上大事なポイントになると考える。いい会場では聴衆の方も「息」を合わせてくれる。そこでようやく「良い表現」が成立する。聴く方が飲食をしながらまちな息をしているのでは、演奏者との息が合うはずもなく、虎が骨をしゃぶりながら横目でこちらを睨んだ状態では良い演奏などとは程遠いものになってしまう。吹き手と聞き手の息の合わない演奏会は音楽表現と無縁なものだと思う。

学会に思う

尾崎 浩一（兵庫県伊丹市立荒牧中学校）

大学院の同窓生に誘われるまま、入会させて頂き、設立総会に参加して、学会の意義深さを知り、大きな関心をもちました。私は、一介の中学校教諭なので、ちょっと居づらさも感じましたが、仕事に生かすことのできる広く、深い情報を得たいという思いと、趣味と実益を兼ねた地歌三味線の稽古の足しになれば考え、末席にお邪魔し続けようと思っています。

さて、今、中学校の音楽授業時間数は年35時間（1年は45時間ですが、ほぼ週1時間です）となり、ますます表現活動が難しくなってきました。それでも、邦楽を取り入れなければならないとか、行事での歌唱指導をしなければならないとか、簡単に表現活動が出来るものと周囲は考えているようです。地道な練習と努力を生徒たちと共に重ねていき、そのような信頼関係の中で音楽が育ち、美しいあるいは感動を呼ぶ演奏表現につながっていくということを理解されていないようで、寂しい限りです。時間を制約される中、それでもやらないといけない、結果を出さなければならぬつらさを感じます。もっと楽しくできないのだろうか？

仕事の愚痴はこれぐらいにして、今の私の楽しみはほぼ地歌です。月2回の稽古を9年も続けていた甲斐あって、今年はお正月に奈良の談山神社で奉納演奏をさせて頂き、また4月には地方（じかた）として地歌舞の生伴奏を（師匠といっしょにですが）させて頂くようになりました。若い頃は、大学でホルンを専攻していたので、地域のオーケストラや吹奏楽団で演奏の機会を得ていましたが、仕事と家庭環境の都合でそうした場から離れていきました。その反動も手伝って私にとって本当に新鮮な新しい分野として地歌にはまってしまいました。こうして和も洋も関心が高くなり、また交友関係も広がる中で、私より少し若い方々に演奏活動への意欲を再燃させている人たちが意外に多いことを感じるようになりました。どちらの分野でも小さい頃から習得してきたもの、大学まで行って学習したことを無駄にしたいくない思いがあって、自分たちの演奏表現の追究にも意欲的です。実際に稽古仲間や仲良しグループでボランティア活動や趣味と実益を兼ねた演奏活動を積極的にしているグループをいくつか知っています。また、そのような活動をしたい、多くの人に良い演奏を聞いてもらいたいと思っているグループの立ち上げの相談も受けました。また、和洋折衷の演奏会の参加の要請も受けました。もっと親くなれば、学会への参加を勧めようと思っています。

こうした演奏活動を希求している意欲的な人や団体にも興味・関心をもってもらえる学会になってほしいと思います。学会の会合に行けば和も洋も関係なく、音にあふれたお互いが勉強できる楽しい学会であればと願います。

徒然なるままに学会を思ひて

渋谷由美 岐阜聖徳学園大学

第一号の学会誌には、興味深く目を通させていただきました。

設立大会での“音を用いた口頭発表”が、あのようにかたちを変えて紙上発表となった姿を目にすると、音を言葉にかえることは、難しいながらも、さまざま方法があることを教えられます。また、(幸い口頭発表を聞かせていただきましたので)掲載論文との比較から、口頭発表後の意見交換がいかに発表(研究?かな?)を洗練させるのか、それによって、いかに紙上発表が充実したものとなるのか、などが読みとれ、意見交換の大切さ・有効性をも知ることができました。

これまで、演奏者と研究者、現場と研究等々、実践と研究・調査の分離が問題にされながらも、なかなかその融合は実現されておられません。本学会の発足によって、“演奏”や“現場”を“研究”へと導くルールが敷かれたかの如く感じたのは私だけではないと思うのです。もちろん、“研究”が“演奏”や“現場”に還元され、いつの日か、それらが相互に循環したならば、理想的なのですが・・・

本学会の誕生を喜びつつ、門戸を狭め、専門化されたなかで研究が磨かれてきたのと同様に(既存の学会批判ではありません。あしからず)、いえ、それ以上に、ひらかれた環境で、さまざまな視点の意見が飛び交うなかから、研究(実践者・研究者)の視野がひろがり、新たな研究へと導かれるような、そんな学会になることを願っています。

札幌での大会までに研究をすすめるぞと意気込んでおりましたが、はや諦めムード。しかし本学会に属する者として、なんらかのかたちで会に想いを届けたく、ペンをとらせていただきました。

科学研究費補助金

時限つき分科細目 表象芸術

科研費申請が長年の夢だった学会員に朗報

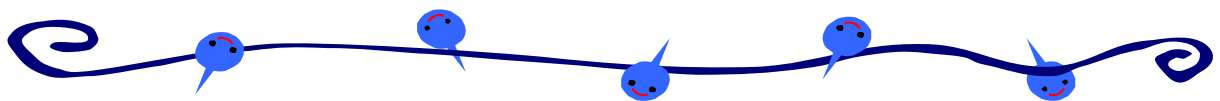
平成16年・17年度日本学術振興会の科学研究費補助金時限付分科細目に「表象芸術 9005」が取り上げられています。これはこれまで応募しにくかったパフォーマンス向けの細目です。応募が多ければ、一般の細目に昇格する可能性もあります。分科細目の説明には、以下のように記されています。

図像学やデザイン学，ポスター，演劇ビデオといった従来の美学が扱わなかったような分野に限らず，舞踏，演劇や伝統芸能，さまざまなパフォーマンスなどの身体芸術，造形としての陶芸やオブジェ芸術，デザイン工学も含め，表象芸術と呼びうるものの発達は近年著しく，今後もより一層展開してゆくであろう。

表象芸術という分野は今後さらに発展する可能性を持っており，かつ人々に与える影響の大きさを考えるとき，この分野の研究を推進することが重要である。

この分野はこれまで「美学」に含められていたが，「美学」とは独立した細目をたてる事によって，この分野の展開を図る。

公募要領と様式等詳細は「平成16年度科学研究費補助金 系・分野・分科・細目表の別表」
<http://kenkyo.jim.osaka-u.ac.jp/01hojo/download/index.html> p.22-23をご参照下さい。



学会は，会員の音楽表現活動をサポートします。

コンサートの後援を希望される方は16頁の様式をご参考に，
メールか，郵送で学会事務局までお申し出下さい。



音楽表現学会入会申込書

音楽表現学会に入会を申し込みます。

氏 名： _____

専門分野： _____

住 所： _____

所 属： _____

(会員名簿に住所を記載しない場合の)

連絡先： _____

連絡先電話番号： _____

連絡先Fax.番号： _____

e-mail アドレス： _____

推薦者名(1名) _____

音楽表現学会に期待されること。ご意見等：

* 学会費：正会員 5,000円，学生会員 3,000円 郵便振込口座番号01370=78225 音楽表現学会

コンサート後援願

会員氏名 _____

所 属 _____

演奏会名 _____

演奏会の趣旨 _____

主な内容 _____

出演者名 _____

期日 _____

会場 _____

日本音楽表現学会 役員

会 長：中村隆夫

副 会 長：草下 實，奥 忍

理 事：安藤政輝，小西潤子，
森川京子，柳井 修

会計監事：川口容子，吉永誠吾

編集委員：安田 香，北山敦康
加藤富美子，権藤敦子，
土門裕之，

編 集 後 記

ニューズレター第2号は「役員選出特集」となりました。学会初の選挙です。準備の過程で、昨年総会の時に、あれもしておかねばならなかった、これもしておくべきだった、と反省することしきり。まだ規定が整っていなかったことが身に滲みます。公正で平明な選挙を目指して、選挙管理委員の方々の協力を得ながら、ここに記載したような方法で実現の運びとなりました。ライラック大会での総会において、みなさまのお知恵を拝借して整備したいと考えています。

では、札幌でお会いしましょう。